

博士學位論文

内容の要旨および審査の結果の要旨

第26号

(平成28年1月授与分)

武蔵大学

はしがき

本号は学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日 文部省令第 9 号）第 8 条の規定による公表を目的として、平成 28 年 1 月 21 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は学位規則第 4 条第 1 項（いわゆる課程博士）によるものであり、乙は学位規則第 4 条第 2 項（いわゆる論文博士）によるものであることを示す。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏名	論文題目
甲第 13 号	博士 (社会学)	コバーチ・エメシエ	社会的機能としてのメディア“謝罪” ～メディア・イベントとしての“謝罪” の実証的比較研究～

氏名（国籍）	コバーチ・エメシェ（ハンガリー）
学位の種類	博士（社会学）
学位記番号	甲 第 13 号
学位授与日	平成 28 年 1 月 21 日
学位授与の要件	学位規則(昭和 28 年 4 月 1 日 文部科学省令第 9 号)第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	社会的機能としてのメディア“謝罪” ～メディア・イベントとしての“謝罪”の実証的比較研究～

審査委員	主査	武蔵大学社会学部教授	小田原敏
	副査	武蔵大学社会学部教授	山下玲子
	副査	武蔵大学人文学部教授	香川 壇

論文の要旨

本論文は、日本のメディアに頻繁に現れる謝罪会見を分析したものである。日本における謝罪会見は、アメリカ、ハンガリーなどとはかなり違った様相を呈しており、その高度に形式化された“謝罪会見”は、日本のどのような社会的背景やメディア環境条件によるものなのかを検討している。

本論によると、たとえば、欧米では、個人と企業は異なる方法で謝罪を行うが、日本では企業も個人もほぼ同じ方法で行う。また、責任の所在についても法的責任と道義的責任としてのお詫びを分ける日本に対して、謝罪と責任を同列に扱う欧米で違いが見られる。欧米の謝罪から見て外形的にも特殊とも見える日本における謝罪会見は、文化的要因とメディア環境要因のふたつから生じていると分析し、日本における社会的責任の負い方や個人と所属集団の関係がその基盤にあると指摘している。

謝罪会見の形式化過程にあっては、伝統的な謝罪において最も重要であった被害者は、当初は報道の中に存在していたが、時間の経過と共に謝罪の場から消え去り、いつの間にかメディアが被害者の立場を代行するようになったという。さらには謝罪自体が被害者のためというより、メディアが納得するために演じさせられている側面もあるという。このため、いつしかメディア側が容認する体裁、方法、内容で謝罪が行われるようになり、それが独特の形式として成立してきたと分析している。また、高度に形式化し、社会で広く共有されてきた“謝罪”であるが故に、これを元にしたパロディーCM（西友のCM）や、謝罪そのものをコメディ映画としたもの（謝罪の王様）まで現れるに至ったと、形式化後のエンターテインメント化までも指摘している。

謝罪の文化的な背景については、まず Goffman を引き合いに出し、偶発的な事件が起き、面子が脅かされる場合、人々が面子を保つための修正プロセスとして謝罪を行うが、日本の場合は、この普遍的な仕組みに加えて、集団と個人の関係性の特色が反映しているのだと言う。Triandis の研究を参考に、集団を重視する日本のような社会では、内集団成員の面子を守ること、つまり

他者面子への関心も重要なことになっていることが謝罪という現象に影響しているとも指摘する。

また、謝罪と責任については、特に欧米においては、謝罪と賠償責任はほぼ同一であるのに対し、日本では謝罪と法的責任は別に扱われることが多く、これは、利害より先に人間関係の修復を重要視する集団の指向性によるという。このように、一口で謝罪といっても、それぞれの文化において異なる意味と異なる役割を持っていると指摘する。

本論のもうひとつの柱は、メディア環境要因の分析である。注目を集めるメディア・イベントとして成立した謝罪会見だが、この背景には、日本のジャーナリズムのあり方が大きく影響していると指摘している。つまり、調査ジャーナリズムが相対的に弱く、記者クラブを中心とする発表ジャーナリズムが日本において特殊な形態に発達してしまったことである。元タイギリスには18世紀からプレスクラブは存在し、諸外国にも同様の組織はあったが、カルテルのような発表側と記者の懇談やリーク共有、匿名取材源表記やクラブの排他的ルールなど、外国メディアからは同じプレスクラブという名称を使うべきでないと言われるほど変容した日本の記者クラブ制度は、この謝罪会見が生まれてきた背景にもなっているという。Freemanの見解を引き合いに出しつつ、海外メディアでは、様々な見解を示すことが普通なのに対し、日本では現実には、どの謝罪会見もすべてのメディアで否定的に扱われ、どの局、どの新聞も同じ立場をとっていることにもこの影響があらわれていると指摘している。

論文の後半では、日本、アメリカ、ハンガリーそれぞれの芸能人、俳優、政治家、企業の謝罪に関して類似事例を詳細に比較しており、さらに、日本企業のアメリカでの謝罪、アメリカ企業のアメリカ人役職者による日本での謝罪という交差した事例も詳しく比較している。これによると、芸能人・俳優の個人的な謝罪については、いずれのケースも自己バッシングし、人に罰せられる前に自分で自分を罰している。こうすると見る側は心情的にそれ以上何も言えなくなってしまうという大谷の研究を引き説明している。また日本的な特徴として、「自分の目線から事件を見ているだけでなく、集団に対してどのぐらい迷惑をかけたかを自分で判断する」部分がみられたという。また社会的贖罪についても、個人の場合は、日本が仕事や外出を控える謹慎であったのに対し、アメリカ、ハンガリーではセラピーとボランティア活動、そして寄附であり、贖罪の仕方も異なるとしている。

さらに、日本企業の日本人役職者がアメリカで謝罪を行ったケース、アメリカ企業のアメリカ人役職者が日本で謝罪を行ったケースを取り上げ、前者トヨタの例では、冒頭に「皆さんと同じように私は車が好きです。みなさんと同じようにトヨタが好きです。」と感情的な表現から切り出すなど日本の謝罪スタイルではない方法で説明、謝罪し、最後にも「私の名前はすべての車に付けられています。必ずお客様の信頼を取り戻すために努力することを、私は誓います。」とこれも日本ではほとんど聞かれない表現で結んでいる。後者のアメリカ企業の例では、マクドナルドの2回の謝罪会見を取り上げ、カサノバ社長が初回の長い髪に明るい服装だったのを、2回目は長い髪をまとめ、グレイのスーツに変え、お辞儀も外国人では見たことがない6秒もの長い時間をかけていたことを指摘し、完全に日本型の謝罪に合わせて行ったことを示した。しかし、いずれの場合も「振り付け」のような作為性をにおわせてしまったことから謝罪としては成功ではなかったと評価されていることも指摘した。このように、内外で行われている謝罪は、それぞれの文化

圏ごとに謝罪行為が異なってくるという。

日本において、2000年代後半に急増し、その後急速に形式化した謝罪という現象を通し、集団や社会という背景の問題をとらえたり、メディア環境の特徴からその遠因をさぐったりしているが、日常的な光景のように感じている日本人には気づきにくい問題点も数多く指摘されている。前述のとおり、謝罪に伴う法的責任と道徳的責任についても、日本では謝罪したからといって法的責任を認めたわけではないと認識されるのに対し、アメリカ、ハンガリーでは、謝罪行為自体がどちらの責任も認めることにつながると考えられているなど、責任と謝罪の関係自体も根本的に異なると示している。さらには、企業などの集団においても、責任範囲が明確な欧米企業では、誰かの失敗について他の人間が謝ることは少ないとされ、家族的ないしはグループ単位で共同責任を感じる日本とはやはり異なるという。こうした日本が元々持っていた特性に合わせてマスメディアとの関係の中で形式化されたのが「日本的な正しい謝罪」であると。

本論文は、このように、しばしばニュースの一項目として登場し、何気なく見られている謝罪会見という現象を、日本での謝罪会見の急増から形式化など現在に至る様式の成立過程、文化的背景、集団と個人の関係の相対的差異からの分析、そしてメディア環境要因からの分析と、非常にユニークな研究に挑戦し、一定の知見を引き出している。

背景にある学識

コバーチ・エメシェ氏は、2006年にエトヴェシュ・ローランド大学博士前期課程、日本語専攻を修了後、2008年から本学人文科学研究科社会学専攻博士前期課程に国費留学生として入学、2014年3月に同、博士後期課程の所定単位を修得し退学している。なお、ハンガリーのエトヴェシュ・ローランド大学在学中、ハンガリー国立演劇映画大学 テレビ番組監督専攻学士課程にも3年在籍し、日本語だけでなく、マスメディアについても学んでいる。

氏の知的探究心は非常に強く、本学大学院を入れて4つの大学の4つの異なる専攻で学んできている。このことは、ひとつの事象を多角的にとらえ、あらゆる可能性を検討していくという研究での重要かつ基本的な所作がごく普通に行えることにもつながっていると思われる。

また、日本語、英語は上級、ドイツ語も読み書きができることから、元々多文化環境の中でそれぞれの相対的な差や特徴を理解していくことができしており、今回の論文でも、現象を観察し、相対的な違いが何に起因するのかを論理的かつ冷静にとらえることを可能にしている。さらに、日本語レベルも難解な漢字交じりの文章を難なく理解し、抽象表現の多い論文の形式で書くことができるなど高い水準にあり、行間を読み取らなければわからない謝罪という行為の的確な分析を可能にしている。

本論文において、たとえば、古典的なメディア研究(Boorstin, McCombs & Shaw 等)、記号論(Umberto Eco, Habermas)、さらに社会心理学・進化心理学(Triandis, 山岸俊男等)の知見からの説明を試みている点、また、日本におけるメディア制度の特殊性という観点から、謝罪という行為の歴史的な位置づけの変化を探ろうとしている点で、氏が学際的かつ幅広い学識のもとに、

本論文を執筆していることが窺える。

論文の構成と研究方法

本論文は、次のような構成をとっている。

第1章は、日本のメディアにおける謝罪会見の形式化とその変質について書かれており、2009年時点では謝罪の仕方がそれ以前とは異なり、ほぼ統一されており、外形的特徴、つまり、頭を下げている角度から声のトーン、頻繁に使われる表現までかなり共通していたことを説明しており、ここに謝罪会見のために危機管理、PR・コンサルティング会社をはじめとする多くのメディアトレーニング企業ないし事業が立ち上がったことも大きいとしている。

第2章は、日本における謝罪の変容と題し、氏のネーミングによる「伝統的な謝罪」から（メディアが様子を報道した）「公開謝罪」、公開謝罪から「メディア謝罪」へ、そして、「パフォーマンス謝罪」、果てはパロディーやコメディとなった「エンターテイメント謝罪」へと進化してきたことを論じている。

第3章は、メディア環境要因を分析すべく、謝罪・メディア・社会の関係について記述している。ブーアスティンを援用し、メディア・イベントとしての謝罪会見から、日本のニュース生産体制の特殊性や文化的背景について検討している。

第4章は、謝罪の比較研究として、個人や企業について、日本、アメリカ、ハンガリーの例を挙げながら分析を加えている。

研究の方法は、謝罪会見の内容分析はもちろんのこと、実際に視聴者がどのように謝罪会見を受け取ったかについての東京、大阪、千葉、埼玉、愛知、岐阜でのインタビュー調査、大学生を対象としたアンケート調査、長期にわたる日本での謝罪報道の流れをさぐる過去に遡った新聞記事分析、新聞に掲載された謝罪シーンの写真分析と多大なエネルギーを要する方法をとり研究の実証性を担保している。

このとおり、日本における謝罪会見の実態とその視聴者の捉えられ方について、インタビューおよびアンケート、新聞紙面とテレビニュースの内容分析により実証的に示した上で問題提起したのち、その発展を歴史的・理論的な立場から論考しモデル化、さらに異なる文化圏における謝罪報道との比較分析を行い、日本の謝罪会見が持つ特殊性を裏付けるという構成となっている。問題意識の明確化から実証までの流れが明快で、博士論文としてだけでなくメディア研究を志す者にとっても、非常に理解しやすい構成となっている。他方、論文の骨子ともいえる実証研究部分において、データ収集のむずかしさも相まって、ややもすれば仮説確認型ともいえる部分も見られている。その点については、今後、さらなる検証の継続を期待する。

また、謝罪の文化的背景、メディア環境要因のいずれの分析にも、内外の多くの先行研究をあたり、多角的な分析と従来の研究では扱われてこなかった点を把握し、検討していくことで、論の独自性を高い水準まで引き上げている。

論旨の妥当性

本論は、謝罪会見という日本的に形式化されたものが、単に偶発的にできあがったものではなく、相応の社会的機能と意味を持ち、日本の文化的背景の中にあって社会的な作用の中で成立してきたということを多様な角度から示している。また、それを中心的な立場で進めたことになる日本のマスメディアが持つ傾向性に関連するのではないかという主張には、一定の論拠が用意されており、全体として論旨は妥当なものであると判断できる。

細かな点ではあるが、以下の点を指摘しておきたい。ひとつに論旨は極めて明快であるが、各論を裏付けるデータ部分の厳密さという点では、不十分な部分も見られる。しかしながら、データの学術的な希少性と特殊性から鑑みれば、これ以上の厳密さを求めるのは、かなり困難をとまなうレベルであろう。

ついで、論の展開において、まだ日本語としてこなれていない表現、言い回しも随所にあるが、主張したいこと、論じたい内容について、意味が不明になるほどの誤りではない。また謝罪の類型化を行う本論文にとって重要な第2章において、ケーススタディーとして挙げられた例と、論旨との間に整合性を欠きそうな点がいくつかみられ、タイポロジー的厳密さに欠けたところもあるが、これらが完成されたものというよりは、性質をより明確化するための表現と割り切れればこれらは許容可能である。これら指摘すべき点もあるが、何よりこうしたテーマにチャレンジし、一定の知見を得られていることを評価すべきであろう。

最後に本論は、部分的にイギリス、フィンランド、ハンガリー、スウェーデン、アイルランドの学会や研究会で発表し、その都度受けた指摘を論に反映させ加筆してきたものであるという。このことが論全体の展開が論理的に整理され、全体として論旨の妥当性にも寄与していると思われる。

オリジナリティーと課題

ともすると外国人が感じた不思議な日本の一現象として片付けられてしまいそうなものを、きちんとした研究テーマとして位置づけ、現象の根幹にある日本社会の指向性や人間集団の性質、そしてもちろん日本のマスメディアの傾向性にまで目を向け関連性を指摘していること自体がきわめてオリジナリティーに富む。また謝罪会見の類型化を行った点も、前項で挙げたような論理性について疑問のある部分もみられるものの、それなりの説得力を持ち、日本のメディアへの批判的視点を含んだ鋭い指摘がなされている。

日本語を含め多言語に堪能である留学生という立場から、日本社会を客観的にとらえ、日本国内の研究においてはこれまで注目されてこなかった現象に焦点を当て、学術的な意味づけを行った点は、大変独創性の高い研究といえる。また、日本語、英語、ハンガリー語の資料を比較し、学術的にきわめて高いレベルで日本語で執筆するという作業を含む本論文は、筆者にしかできないといってもよいほど、貴重なものといえるだろう。

他方、論文の根幹ともいえる部分において、日本語表現の稚拙さから誤読を招くおそれのある箇所がいくつか見られた。その部分については、改善の余地があると思われる。

なお、博士論文として公開する場合に問題になるかもしれない点として、映像資料の参照元の多くが YouTube のものである。この中には、違法アップロードされた映像が含まれている可能性もあり、公開に際しては確認の必要があると思われる。

また、欲を言えば謝罪者、メディア、視聴者（一般市民）の三者のうち、謝罪者がどう表現され、切り取られているか、行為がどのようなものになっているかについては最終的なニュースや記事になった後の詳細な分析があるものの、取材する側、論の表現を借りれば、謝罪者を許したり許さずに追いかけて回すというメディアの送り手の意識や謝罪会見での質問や謝罪会見に関するニュースヴァリューの判断については、取材現場の参与観察や送り手のインタビュー調査が少しでもあれば、より実証性に寄与したのではないかと考えられるが、共同研究でも送り手の実証的研究は簡単ではなく、個人の研究にそこまでを求めるのは現実的ではないかもしれない。

審査の内容と結果

最終試験（口述試験）：2015（平成 27）年 10 月 8 日実施

最終試験の結果：合

関連ある科目の試験（語学試験）：母語（ハンガリー語）以外の日本語においても論文執筆を問題なくこなしているうえ、すでにイギリス、フィンランド、スウェーデン、アイルランドでの英語による学会発表を行っていることから、審査委員会は、試験をするまでもなく母語以外の言語能力は十二分にあると判断した。

審査結果

本審査委員会は、厳格な審査と最終試験により、本論文「社会的機能としてのメディア”謝罪”～メディア・イベントとしての”謝罪”の実証的比較研究～」が、人文科学研究科平成 26 年 12 月 4 日制定の「学位論文及び特定課題研究の評価基準」にある博士論文の水準を十分満たしていると認め、学位授与について可と判断した。

平成 28 年 3 月 発行

発行 武蔵大学

編集 武蔵大学 運営部大学庶務課

〒 176-8534 東京都練馬区豊玉上 1-26-1

TEL. 03(5984)3713
